

# リビングヒストリー（生きた歴史体験）

## 郷土の偉人をテーマとしたプログラム及び教材開発

鳥屋尾健、田村のり子、村井孝一【いずれも（公財）キープ協会 環境教育事業部】

キーワード：リビングヒストリー、セルフガイド、地域資源、教材開発、観光、ESD、SDGs

### 1. はじめに

（公財）キープ協会では、1983年環境教育事業部を発足以来、「インタープリテーション」の普及・研究に務めてきた。2021年度、まだ日本では実践事例が少ないと思われる「リビングヒストリー」のプログラム及び教材開発を行った。今後の日本での展開の一助になればと考え、ここに報告する。

### 2. 事業の概要

○A5版24ページのセルフガイド教材の開発

（2021年6月～1月）

○プログラムは、以下の通り。

- ・プログラム名：八ヶ岳フットパス  
～ポール・ラッシュ博士の開拓者精神にふれる旅～
- ・日時：2021年11月末及び12月中旬平日 計4回  
10:00～15:00
- ・場所：山梨県北杜市 清泉寮周辺
- ・対象：16歳以上一般 定員15名
- ・スタッフ：2名（進行役+ポールラッシュ役）
- ・テーマ：この地には、戦後「祈りと奉仕の精神」で「与えられたものでなく、自ら築き上げた民主主義」を実践した先人がいた。

※本事業は、環境省公募事業「国立・国定公園での滞在型ツアー推進事業」を活用し事業予算を確保した。

### 3. 実践の詳細と試行錯誤

○教材開発

教材開発責任者・学芸員（主執筆者）・デザイナーの3者にて、冊子コンセプト、活用時のイメージ、作成台割、作成スケジュール等を練り上げながら進めた。

- ・ポール・ラッシュ博士の取組を「勇者：誰もが恐れる困難に立ち向かい偉業を成し遂げた人」という軸で整理。
- ・主対象を中学生に設定（中学生が理解しやすいものは、大人にとっても理解しやすい）
- ・フィールドで対話がうまれる時間をイメージしながら「本質的な問い」を探求

○プログラム実践

石碑や門柱等、当時を想像するのにふさわしい場所や施設の立地等また、また気温が5度程度の厳しい季節であることも踏まえ、午前2時間・午後2時間 各4カ所をポイント設定し、導入及びふりかえりにあたる時間は暖房のある室内にて実施した。

進行役とポール・ラッシュ博士役をおき運営した。キャラクターに扮するインタープリテーションでは、キャラクターに

なりきる「一人称型」とインタープリターの立場を維持する「三人称型」のスタイルがある。今回は、博士のトレードマークである帽子を着脱することで「一人称」の時と「三人称」の時を行き来する形で実施した。また、まずは博士の生きた時代を知る座標軸として、導入部で年表形式にて、彼の生涯と時代の主な出来事を概観した。

各ポイントでは、井戸をのぞき込んだり、当時の写真を提示したりしながら、教材開発での「本質的な問い」を活かした対話や想像を広げる時間を重視した。

### 4. 今後の展開

博士の足跡にふれることができるポール・ラッシュ記念館がこの地にあり本事業での監修に関わった学芸員秦英水子氏と共に、今後以下の展開を予定している。

○地域の郷土学習等での活用。

小学校4年生の「地域の発展に尽くした先人」や6年生の「総合的な探求学習」また、博士と縁の深い立教学院グループ及び聖公会関係での移動教室等での活用

○観光での活用

宿泊施設である清泉寮に滞在しての冬場1泊2日のシニア層を対象とした事業の展開

### 5. 結びに

日本には、各種遺跡や城郭及び城跡、博物館・人物館、郷土資料館等多くの歴史をテーマとしたインタープリテーションの展開が可能な場所がたくさんある。

特に「郷土学習」「観光」という視点で、そこにインタープリテーションの視点が入ることで、地域の宝に光があたり、また歴史の中から、現代に通じる「本質的な問い」を問う機会が増えていくことが期待される。



写真1 プログラム実施風景

参考文献

- 1) インタープリテーション入門, 1994, 小学館 第5章 創造的な手法「キャラクターに扮する」: pp.96-106